調 査 研 究 彙 報

美術工芸研究室

日本美術院彫刻等修理記録の刊行（特別研究）　本年度は同書のⅣとして，奈良県法隆寺の彫刻等65件について修理記録の整理，研究を行い，図解294頁，解説137頁，写真132頁にわたる記録を公刊した。本巻は明治末年から大正初年にかけて修理が行われたものが多く，当時の修理事業の実体を知る上でも興味深い資料である。

奈良県及び周辺の文化財調査　桜井市，明日香村など地域を限った悉皆調査と，寺院単位の調査を行なっており，注目すべき幾つかの作品が見出された。このうち郡山市超願寺の木造十一面観音立像は9世紀末～10世紀初頭の制作と考えられるもので，乾漆を併用する技法などから奈良県内では珍しい真言密教系の様式の作品として注目された。

建造物研究室

桂離宮建築調査　桂離宮古書院・中書院の解体修理に伴って，建物下の発掘調査，屋根瓦の整理編年調査，建物の後世変更箇所，および技法の調査について，昨年度に引続き宮内庁に協力した。（工藤・猪熊）

チェルクエト村の調査　1977年8月29日から10月28日までの2ヶ月間，文部省在外研修により主としてイタリア中部の一山岳集落チェルクエト村の民家と集落の調査を行い，その成果を『学報第33冊』として刊行した。（宮澤）

当麻寺薬師堂の調査　解体修理工事にともなう復原調査に協力した。当麻寺薬師堂は文安四年（1447）の棟木銘がある3間×3間の建物で，化粧天井を張らずに未完成のままで終り，野小屋組を見せている。解体調査の結果，正面三間と両側面の南一間とに扉があることがわかったが，それらの開口部に見合う縁は付いていなかったこともわかった。内部の野小屋組みをみせることとともに未完成の建物であるためであろう。8月，9月（上野）

奈良県民家の補足調査　前年度に奈良県教育委員会に協力して行なった緊急民家調査の補足調査。西吉野村・東吉野村・山添村・御杖村・室生村で10棟の民家と，県指定文化財になっている民家とを調査した。8月，9月（上野）

箱木千年家の写真測量と発掘調査　箱木家住宅は六甲山の裏側，神戸市北区山田町にあり，昭和42年に指定された我が国屈指の古さを誇る民家である。この民家はダム建設による水没地区にかかるため，隣接する造成地に移築されることになった。解体修理工事に先立って，当研究所は昨年度から継続の特定研究「写真測量による建造物の経年変化の研究」（代表者工藤圭章）の一環として，同住宅の外観，内部の写真測量を行い（6月），その後，建物の解体が進み，壁・床・屋根等を取除いた状態で，建物の内部の軸部構造の写真測量を行なった（8月）。

解体作業と復原調査は9月末日まで続けられた。解体終了ののち，敷地の発掘調査が行われることになり，神戸市教育委員会によって発掘調査委員会が結成され，当研究所は調査指導と

して発掘調査に協力した。調査期間は10月から翌年の３月までの６ヶ月を要した。

解体修理調査で，新座敷は当初別棟であり，江戸時代末頃に千年家と接続したものであることが明らかにされたが，発掘調査の結果，新座敷ではさらに整地層が三層に分れ，４期にわたる別棟建物跡を検出した。また，千年家では少なくとも現存当初柱の礎石は旧位置を保ち，土間部分の旧礎石位置を五箇所を確認し，西・南面下屋では旧礎石上に新礎石を重ねるなど，当初平面の規模・形式をほぼ確認できた。また，土間内部の変遷については，馬屋に３回，竈に４回，流し場に２回，風呂焚口に３回（当初は風呂なし）の造替えが認められた。

千年家の建立時期は15世紀頃と推定されるが，この時期の唯一の遺構とも云える民家の変遷を，部材と発掘の両面から追求し，明らかにし得たことは学術的に極めて貴重である。

歴史研究室

東大寺文書調査　文化庁よりの委嘱によるもので，1974年度からの継続調査。未成巻文書第３部第４（請文）22号より第３部10（請取状）708号までの調査を行なった。また写真撮影は第１部第12（大部庄）より第１部第25（雑）の一部までを完了した。

西大寺典籍古文書調査　従来よりの調査の継続。６月，３月。

興福寺典籍古文書調査　前年度よりの調査の継続。４月，10月。室町時代の引付中には土一揆に関する興味深い史料があり注目される（その一部は本年報に本文紹介）。

仁和寺典籍古文書調査　昭和33年度以来の継続調査。２～３月。塔中蔵階下収納典籍類ならびに御経蔵第150函所収文書の調査を行なった。

第３回木簡研究集会　1977年12月13・14日の両日，平城宮跡発掘調査部資料館会議室において開催された。前２回の研究集会の成果をうけて，長岡京跡，但馬国分寺跡等からの新出土木簡の報告，北大津遺跡出土木簡の紹介，また払田柵，胆沢城での戦前出土の木簡と近年出土木簡についての報告，さらに日本簡にみられる書風の変遷についての研究報告，及び居延漢簡にみえる帳簿類についての研究報告が行われた。

第１日では，太政官厨家と関連があるかとおもえる長岡京出土の230点の木簡についての高橋美久二氏の報告，国分寺跡からは初めての出土例である但馬国分寺出土38点の木簡についての岡崎正雄氏の報告は，その内容とともに従来の木簡に新しい事例を多数増加した点で注目すべきものであった。また払田柵において1930年に出土した木簡についての平川南氏の報告は，木簡についての先学の苦労をしのばせるものがあった。北大津遺跡出土の木簡についての林紀昭氏の報告は国語史研究上貴重な内容をもっていた。

第２日では，田中稔氏の日本簡での書風についての報告では，平城京における唐風書法受容の過程や地方の各国々での書風の特色についての問題提起が行われた。永田英正氏の居延漢簡についての報告は，居延簡の形式分類から出発して，帳簿類の分類と検討から，帳簿の作成過程ならびに漢代の文書行政一般について展開された。

その他の調査　高山寺　４月，７月。多度神社（神宮寺資財帳調査）　４月。東寺観智院金剛蔵

聖教調査　5月，9月。法輪寺　6月。石山寺　8月，12月。醍醐寺　8月。大覚寺　4月，9月。東京国立博物館（朝鮮金石文拓本調査）　10月。正倉院聖語蔵調査　11月。東京大学史料編纂所（島津家文書）　1月。

平城宮跡発掘調査部

各地遺跡出土遺物の保存処理　考古第一調査室は次の木製品，金属製品の調査研究を行なった。香川県善通寺遺跡出土の木製品一括，京都府小殿遺跡出土の木製品一括。大阪市東奈良遺跡出土鉄鋌・刀子各1点，長野県東光寺出土経筒1点，島根県中山B1号古墳出土の短甲1領，この短甲については実大復元模型を製作した。

伯耆国庁の発掘（第5次）　外郭北東部で5間×3間の南廂をもつ東西棟建物を中心とする建物群の存在が明らかとなった。内郭同様，掘立柱建物から礎石建物へつくりかえられている。また，南限濠を確認し，国庁の南北距離が227.5mで，東西に長い区画となることがわかった。8月～9月。倉吉市教育委員会。（佐藤・安田）

茨城県地方古瓦の調査　茨城県歴史館で開催された「茨城の古瓦」展を契機に，茨城県地方出土瓦の調査を行なった。東国での特異な状況や畿内との関連等，新たな知見を得た。10月。（森・田辺・岡本・毛利光）

法隆寺所蔵瓦の調査　かねて懸案事項であった法隆寺所蔵瓦の調査を開始した。継続調査として今後永く行う調査であるため，今年度は第1回目として調査法の確立を主たる目的とした。調査は考古第三調査室を中心として各部局共同で行う。10月～12月。

美濃国分寺跡環境整備　大垣市の依頼により，発掘調査で明らかになった講堂の塼積基壇復原工事の実施計画と指導を行なった。1977年4月～1978年3月。（安原・田中）

江馬氏庭園遺跡調査　岐阜県吉城郡神岡町にある中世の江馬氏の館跡・庭園の発掘調査の指導を行なった。8月。（安原・田中・渡辺）

明石城公園整備　明石市の依頼により明石城環境整備の指導を行なった。12月。（安原・田中）

竜安寺庭園調査　竜安寺方丈前の庭園を囲む土塀修復に伴う，事前の発掘調査の指導を行なった。今回調査の結果，史料等より屋根は瓦葺からコケラ葺に変更して修復が行われた。12月～1月。（安原・田中・渡辺・加藤）

文化財の保存修復に関する国際研究集会発表要旨　11月24日～28日，東京国立文化財研究所が主催した「木造文化財の保存修復に関する国際研究集会」には，国内からの6名の発表者に加えてカナダ，アメリカ，インドなど6ヶ国から専門家が参加した。同研究集会では水漬けの出土木材の保存に関する研究発表をおこなった。―平城宮跡出土の木製遺物は2万点を越える木簡をはじめとして，柱根・井戸枠等の建築部材など，およそ数百万点に及ぶ。これらの木製遺物は，現在，ＰＥＧ含浸法（高分子のポリエチレングリコールを含浸させて硬化する方法）と，真空凍結乾燥法（あらかじめ，木材の水分を有機溶剤に置き換え，これを真空乾燥する方法）によって処理されている。前者は北欧でおこなわれている方法を踏襲しているが，後者は，当研究所独自の低

温方式の真空乾燥法を開発している。同法は世界的にも例がなく，処理後の出来ばえは他に類をみない。すでに1000点を越える木簡の処理に成果をあげている。（沢田）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部

マルコ山古墳の発掘　墳丘と盗掘壙及び墓室の調査。墳丘は版築積による円墳で，周囲に２重の礫列をめぐらす。墓室は凝灰岩製の石棺式石室。墓室の内面は天井・側壁・床ともに漆喰を塗る。遺物は漆棺とその装飾具，太刀鞘金具及び１体の人骨があった。７世紀末。奈良県明日香村。２月～３月。（工藤・猪熊・井上）

飛 鳥 資 料 館

誕生仏の調査　現在古代の誕生仏は30点程知られているが，今年度は久世廃寺出土（城陽市保管），悟真寺，市川市平川町出土（市川市博物館保管），三仏寺，与田寺，聖福寺，広福寺，広福護国禅寺の計８点の金銅釈迦誕生仏について調査を行なった。この調査は53年度秋の特別展「日本古代の誕生仏」の準備を兼ねたものである。

埋蔵文化財センター

西長浜原遺跡の発掘調査　沖縄県国頭郡今帰仁村字与那嶺所在。沖縄貝塚文化中期の集落跡である。二次にわたる発掘調査の結果，沖縄県下ではじめて竪穴住居址を検出。30余の住居が馬蹄形に並び，４時期に及ぶ建替えが認められた。５月～６月，10月～11月。

（猪熊・松沢・岩本圭・黒崎・山本）

四天王寺の発掘調査　再建計画にもとづき，東大門跡と鼓楼跡を発掘。どちらも中心伽藍創建時には存在せず，奈良時代前期に建てられたことが判明。東大門は当初掘立柱の塀であり，のちに３間×２間の門となった。伽藍中軸線に対して北で６度ほど西にふれている。鼓楼に関しては，奈良時代の基壇西・南辺を確認。講堂とは歩廊で結びついた可能性がある。平安時代にはやや規模を大きくして，以後昭和の戦災までに数回の建替えを認めた。７～８月（山本）。

周防国府跡の発掘調査　周防国府跡の発掘調査は，国府東限を確認する目的で，防府市教育委員会が1977年７～８月に前期調査を，1978年２～３月に後期調査を実施し，これに協力した。

前期調査は現国府中学校校庭において，東西約50ｍのトレンチを設けて実施したが，遺構は校庭造成以前に既に削平されたらしく全く遺存していなかった。後期の調査は国衙四丁目以北の数ヶ所の水田で実施した。推定東限線と国府推定三条大路との交点近くの発掘区では，南北に通る幅約２ｍの築地跡（延長21ｍ）と，それに伴う東・西の雨落溝を検出した。ここに初めて国府東限線を確認することができた。（工藤・田辺・岩本圭）

道成寺の発掘調査　和歌山県日高郡川辺町鐘巻所在。収蔵庫建設に伴う事前調査である。道成寺には，現在，国の重要文化財指定の本堂，仁王門をはじめとして，塔，庫裏などの建物があるが，創建伽藍については不明であった。本堂の東方約25ｍにおける発掘調査の結果，複廊の西面回廊を南北10間にわたって検出した。８世紀後半。回廊の配置からみて，現本堂，塔，仁王門が創建の建物位置を踏襲している可能性がある。昭和53年２月～３月。（木全・田辺）